広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第38号　2010．3〉

中学校における新しい国際交流プログラムの開発Ⅱ

― Exploris Middle School・Odyssey Schoolとの交流を通して ―

神原　一之　　鹿江　宏明　　中本美奈子　　山崎　学肖
松村　　健　　朝倉　　淳　　深澤　清治

１．はじめに

本研究は，異文化・異文明を理解し，共存していく力をつけるために，どのような国際交流プログラムを実施することができるのか，指導の指針を明らかにしていくことを目的として，2008年度より開始した。

そのために，Exploris Middle School（以下Exploris）及びOdyssey School（以下Odyssey）の両校と東雲中学校との国際交流プログラムの実践を通して，その成果と課題を明らかにすることから指導の指針を探ろうとした。ExplorisとOdysseyは，ともにアメリカにある学校だが，前者は東海岸にある博物館立の学校で本校と姉妹校提携を結び，後者は西海岸にある私立の学校で姉妹校提携を結んでいない学校であり，所在地・設立形態・学校間関係に大きな違いがある。このような違いが国際交流に与える影響も研究の視野に入れている。

第１年次の研究の成果としては，英語を学び始めてまもない中学生にとって，国際交流において最も障壁になるのは語学力であるが，語学力が十分でない中学生であるからこそ，尚更，国際交流の場面では，伝えたい内容を明確にする指導・支援が重要であることがわかった。そうした指導に支えられた交流を通して，結果として，学習意欲を高めたり，他国や自国の文化に対する理解を深めたり，またグローバル・マインドの醸成につながることが期待できると考察した。

本年度は昨年度の課題を踏まえ，伝えたい確かな内容を持たせること，相手が伝えたい内容をくみ取ることに指導の重点を置き，プログラムを計画・実践し，その成果と課題を明らかにすることが目的である。

２．Explorisとの国際交流

（１）交流の概要

Explorisは，アメリカノースキャロライナ州ローリーにある博物館立の学校である。2001年に本校と姉妹校提携を結び，2003年より教職員・生徒の相互訪問，交流が開始した。毎年Explorisの生徒約８名が２名の引率教諭とともに３月に来校している。Explorisの生徒は，本校生徒の自宅にホームスティし，一緒に登下校し，午前中通常の授業に参加する。午後からは，平和公園などの施設見学やスポーツ交流会，総合的な学習の時間の研究発表会，クラブ活動の参加などに参加している。

平和公園などの施設には，総合的な学習のExplorisグループが同行し，スポーツ交流会は，生徒会が企画し有志により活動している。また，総合的な学習の時間の発表会は，３年生が両校の共通テーマ，例えば「水」「平和」「食」などを設定して１年間取り組んだ研究成果を互いに報告し合いディスカッションしている。

交流の最終日には，生徒会を中心にして，Sayonaraパーティーと題したお別れ会を開き，交流で学んだことを伝え合っている。

本校からは，毎年８月に生徒約８名が引率教諭２名とともに渡米している。８名の生徒の選考は，渡米の目的を記した作文や英語面接などにより行っている。渡米における交流では，通常の授業への参加はもちろん，日本文化の紹介を様々な領域や方法で行っている。また，本校教師による授業を行い，日米の授業交流・比較を行っている。

（２）本年度の交流プログラム

2009年３月に実施した交流プログラムについて，概要を示した後，ここでは特に，本校２年生がExploris生徒に対して行った日本文化紹介とExploris生徒が本校生徒に対して行ったアメリカ文化紹介について詳しく述べる。

Kazuyuki Kambara, Hiroaki Kanoe, Minako Nakamoto, Michinori Yamasaki, Takeshi Matsumura, Atsushi Asakura, Seiji Fukazawa, Developing for new international exchange studyⅡ－Through exchange program about Exploris Middle School and Odyssey School－

１）交流実施日

2009年３月14日（土）～３月20日（金）

２）交流プログラム

3月13日夜に来日し，翌日より表1のような日程で交流プログラムを実施した。14日，15日の２日間は，ホストファミリーとの交流を中心に行った。16日から20日までは，本校に登校し午前中は，基本的には配属されたクラスで授業を受け，午後は計画されたプログラムに沿って活動した。

表１　Explorisとの交流プログラム（2009年）

月日	午前の活動 （主たる交流者）	午後の活動 （主たる交流者）
3/14 （土）		宮島観光 （ホストファミリー）
3/15 （日）		Welcome Party （ホストファミリー）
3/16 （月）	Welcome Ceremony （生徒全員） 日本文化紹介活動 （中学２年生）	総合的な学習プレゼンテーション （中学３年生） 【テーマ「食」】
3/17 （火）	特別支援学級生徒との交流 （特別支援学級生徒）	ミニ運動会 （中学２年生）
3/18 （水）	アメリカ文化紹介活動 （中学１・２年生）	平和公園訪問 （ホストファミリー）
3/19 （木）	日本の通常授業参加 （生徒全員）	部活動参加 （各部活生徒）
3/20 （金）	Sayonara Ceremony （生徒全員）	Sayonara Party （ホストファミリー）

３）日本文化紹介

この日本文化紹介活動のねらいは，日本とアメリカの文化の共通点や相違点を理解し，英語を用いて表現することである。

日本文化紹介を行ったのは第２学年２クラス(78名)で，クラスごとに２時間の設定で実施した。各クラスを８グループに分けて，それぞれのグループに１名のExplorisの生徒を割り当て，グループごとに７分程度の時間を与え，ローテーションで紹介した。

指導の際に重点をおいたのは，伝えたい内容をもつという点である。２クラスで異なる手法をとった。一方のクラス（１組）は，既存の生活班を活用し，グループで伝えたいトピックを話し合いにより絞らせた。英語の授業と放課後の時間を利用し，絞った内容について表現を指導した。

もう一方のクラス（２組）は，各個人がより知りたい日本の文化について記述し，「遊び」「食文化」「歴史」「国技」などのカテゴリーを設け，自分の興味・関心がどのカテゴリーに入るのか決定し，似通った興味・関心をもつ生徒同士でグループを決定させた。グループの人数は３～５名である。テーマについての調査は，総合的な学習の時間を利用し，表現については英語の時間で指導した。

１組は「自分たちが紹介したい日本文化」というテーマでトピックを決定した。生徒が決定したトピックは，「福笑い（写真１）」「あやとり（写真２）」「お手玉」「カルタ」「だるまさんが転んだ」など「伝統的な日本の遊び」で，それらの遊び方を英語で説明し，一緒に遊びを体験する方法をとった。

例えば，「お手玉」を紹介するグループは「お手玉の中には何が入っているでしょうか？」などとクイズ形式をとり，一方的な説明をExploris生徒が聞くのではなく，双方向のコミュニケーションを図りながら説明していた。

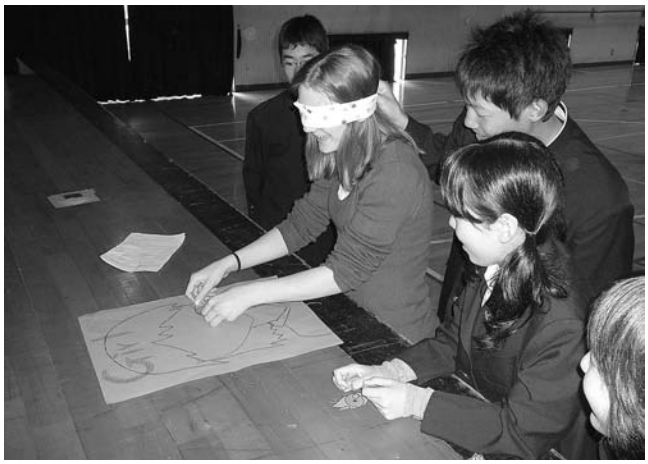

写真１　福笑いをするExploris生徒

写真２　あやとりを教える

２組の各グループのテーマは，「遊び」「伝統料理」「歴史」「国技」「祭り」「ことば」「作法」「武器（写真３）」である。各グループとも調査した内容が豊富であり伝えたいことが多くあったが，与えられた７分間に表現できるよう，内容を絞り込み，英語をしっかり使い伝えようとしていた。例えば，「遊び」をテーマにした

グループは，日本の伝統的な遊びをただ紹介するのではなく，それらの遊びに工夫を加えたものを紹介していた（写真４）。日本語の表現を英語に変換するための十分な語彙を持たない生徒たちにとっては，英語だけで表現することが難しい様子だった。しかしながら，分からないときにはジェスチャーを駆使してどうにかして伝えようと試みる姿が見られた。

一方的に伝えるだけにとどまらず，Explorisの生徒から質問が多くみられた。予想外の質問に対して，どのように答えればいいのか困惑している生徒もいた。ジェスチャーをしたりや絵を示したりすることで，少しずつ内容が深まっていった。

１組，２組とも伝えたい内容をしっかりと持っていたが，１組のように「遊び」という動きが伴う活動は，互いの生徒にとって，伝えやすく，受け取る側も理解しやすいようである。英語で伝えることができたことに満足する生徒が多く見られた。１組に比べると，２組の方が伝えたい内容を十分に準備しているにも拘わらず，自分たちが伝えたい内容を英語という外国語の障壁のため，伝えきることができなかった。多くの生徒たちは，伝えたい内容を消化しきれなかったことに満足していなかったが，コミュニケーションの難しさと同時に，意志が伝わったときの楽しさも感じていた。

写真３　日本の刀についての説明

写真４　おはじきをすごろくにとりいれた遊び

４）アメリカ文化紹介

アメリカ文化を同世代の生徒から，直接教わることで，異文化に対する関心を高め，自国の文化をより深く理解することにつながること，また通常の授業とは異なり，Explorisの生徒からの情報発信という学習形態をとることで，英語による生徒間のコミュニケーションが活性化され，生徒のコミュニケーション能力が高まることを期待した。

Explorisの生徒が４グループに分かれて，アメリカ文化紹介を中学生１・２年生に対して行う。文化紹介のグループは「キルト制作」「ダンス」「音楽」「ペーパーフットボール」の４つあり，クラスをそれぞれ４グループに分けて，10分程度で，ローテーションしながら１時間の授業の中で行った。Explorisの生徒による説明のみで原則行い，どうしても必要と判断した場合のみ，日本人教師が通訳として介入した。

＜キルト作成＞

キルトはアメリカの家庭的な縫物である。Explorisの生徒が，キルトの説明とキルトの縫い方を説明した後で，生徒一人ひとりが実際にキルトを作っていった。手先の細かい作業であるが，織り方が分からないところはExploris生徒に尋ね，見よう見まねで行っていた。それぞれが少しずつ縫って，最終的に大きな１枚のキルトを作っていった（写真５）。

写真５　キルトを学ぶ生徒の様子

＜ダンス＞

Explorisの生徒が，アメリカのティーンの間でよく踊っている曲を３曲紹介した。はじめにステップの基本型を指導し，その後曲に併せて，ステップを踏みながら一緒に踊った。本校の生徒の多くは，ダンスを踊ることに馴染みがないため，当初は恥ずかしがり，積極的に踊ろうとしなかったが，繰り返し踊ることで，

踊りを覚え，声を出しながら楽しく踊っていた（写真６）。

写真６　ダンスを学ぶ生徒の様子

＜音楽＞

昔からアメリカでよく聞かれている音楽を歌って紹介した。このExplorisの二人の生徒は，音楽スクールに通っており，素晴らしい歌声で日本人中学生を魅了していた。ただ歌って聴かせるだけでなく，日本でもよく知られている「ドレミの歌」の英語版を一緒に歌ったり，ミュージカル風に踊りと音楽を交えたパフォーマンスを見たり，活動に工夫が見られた（写真７）。

写真７　音楽を一緒に楽しむ生徒

＜ペーパーフットボール＞

フットボールは，アメリカで人気のあるスポーツの一つで，ペーパーフットボールはアメリカの子どもたちにとって人気のあるゲームである。プロチームの名前が書かれている用紙を使い，ボールを投げる代わりに，ボールの紙を輪ゴムにひっかけて机の上で飛ばし，模擬フットボールをするという遊びである。遊びの紹介だけでなく，フットボールチームに関するクイズもあり，アメリカの誇るスポーツ文化を体験することができた。

これらの４つの活動は，一方的に伝えるというよりは参加型の活動であることに特徴がある。

英語学習初期の１年生にとっては，最初はExplorisの生徒とのコミュニケーションがぎこちなかったが，一緒に活動をすることで，次第に笑顔になり，英語を使って尋ねてみようという気持ちが高まり，会話をする生徒が増えていくのがわかった。

２年生は，１年生に比べて英語が堪能であることやこの活動の前に自分たちが文化紹介活動を行っているため，コミュニケーションがスムーズに行われていた。

事後に行ったアンケート調査の自由記述から，活動を通じて，積極的に関わりたい，コミュニケーションを図りたいという意欲が高まるとともに，国際交流に関する意欲に高まる生徒がほとんどであった。

＜生徒の感想＞

・もっとＥＭＳの人と話したりする機会を作ってほしいです。渡米したいなと思いました（１年）。
・日本とは違う文化などをもっと学びたい。できれば実施にアメリカに行ってみたいと思う（１年）。
・もっとジェスチャーだけでなくて，言葉が通じるようになりたい（１年）。
・交流の場が広がったと思います。２年生で習った英語も使えるので，会話の幅が広がりました（２年）。
・去年はなかなか話すことが出来なかったけど，今回は少しだけど話せるようになったので，面白い（２年）。
・昨年よりは自分からどんどん質問したりできた（２年）。

（４）考　　察

指導のポイントでもあった「英語をリアルな場面で活用する」と「伝えたい内容を明確にする」ことを重点に置き，お互いの国の文化紹介のプログラムを作成した。　教師を介さず同世代の日米の生徒が英語を活用してコミュニケーションをとったり，伝えたい文化を個々の興味・関心に応じて明確化させたりしたことで，前項の生徒の感想に現れているように，生徒たちのモチベーションはかなり高まったことが分かる。

ただし，伝える内容を明確にすることは，指導の重要な視点であるが，日本文化紹介やアメリカ文化紹介で見られたように，中学生にとって詳細な内容や微妙なニュアンスを他国語を用いて伝達することは容易なことではない。そこで今回のように，参加型の活動を多く取り入れることが中学生にとって特に効果があると考える。

また，中学１年生と２年生では，英語活用能力に差

があることから，学年によって活動の内容に段階を設けたことで，次年度の明確な目標をもたせたり，なりたい自分をイメージさせたりすることができた。

３．Odysseyとの国際交流

（１）交流の概要

Odysseyは，アメリカカリフォルニア州サンマテオにある私立の学校である。いわゆるgiftedと呼ばれる生徒を対象に独創的な教育活動を展開している学校である。Odysseyの卒業旅行は毎年日本で行われ，東京，宮城，京都，広島などを訪問している。Odysseyの生徒は日本語が必修教科で，日本文化，政治について学校で学習している。ひらがなを書いたり読んだりする生徒がほとんどである。本校とは，2007年より毎年，宮島にて１日の交流活動を行っている。ただし交流に参加しているのは，第３学年の総合的な学習Odysseyグループの生徒を基本とした有志である。

過去２年間「宮島てらこや」※１の協力をいただき，「お箸作り」や「もみじまんじゅう作り」を一緒に行った。また，「ディスカッション」活動において，これからの交流の可能性について意見を出し合い，メールによる日常的な交流も始まった。

今年度の活動は昨年度のディスカッションで話題となった内容をもとに，Odyssey生徒と東雲中学校生徒がともに自分たちの力を活かして取り組むことのできる活動を設定した。

（２）本年度の交流プログラム

１）実施期間

平成21年5月16日（土）

２）実施場所

宮島島内と宮島大聖院

３）交流のねらい

広島の文化や歴史を海外の中学生に伝えるとともに，アメリカの中学生から見た広島について知る。

４）交流プログラム

９：00　宮島口集合
10：00　宮島島内のフィールドワーク
13：00　プレゼンテーション（FWの内容）
14：30　ディスカッション（互いの文化・歴史）
16：30　サヨナラセレモニー（歌とダンスの披露）

５）交流の実際

①フィールドワーク

東雲中学校生徒とOdysseyの生徒が混ざった１つのグループを作り，宮島島内で与えられたミッションを成し遂げていく活動を考えた。各グループは，東雲中学校生徒３名，Odyssey生徒２名で構成され，互いに協力しないとできないようなミッションを与え，グループ内で，コミュニケーションを図りながら挑戦するように促した。

表２　ミッションの例

Your Mission
○Find a person whose name is “Natsu” and take a picture with her.
○宮島にいる違う種類の動物を４匹見つけ出し，写真を撮りなさい。
○When and why was Itsukushima shrine built?

②プレゼンテーション

フィールドワークで調べた内容を発表し合った。Odyssey生徒はできるだけ日本語で，そして東雲中学校生徒はできるだけ英語を使って発表するように指示した。発表内容の分担をグループ内で相談し，コミュニケーションを活発に行いながら，活動を進めていた。

③ディスカッション

当日は雨天だったために事前に考えていた弥山登山を中止して，ディスカッションに変更した。設定したテーマは，「週末の生活」「校風」「日本で人気のアメリカ料理」「学校での生活」「学習している教科内容」など生徒たちの生活に関するものである。グループで交流をし合ったあとで，交流内容を全体に伝える活動を行った。ここでは，Odyssey生徒は東雲中学校生徒の内容を紹介し，東雲中学校生徒はOdyssey生徒の内容を紹介するという形式で発表させた。発表に付け加えが必要であれば，両校の生徒がフォローするように指示し，発表を進めていた（写真８）。

④サヨナラセレモニー

お互いに最後は歌を披露した。Odyssey生徒は日本で人気のあるポップソングを，東雲中学校生徒はアメリカのティーンに人気のある「ハイスクールミュージ

写真８　ディスカッションの様子

カル」を発表した。お互いの生徒がお互いの国で人気のある歌やダンスを披露することで，自然と一体感が生まれ，見ている人たちも口ずさんだり，一緒に踊ったり楽しい雰囲気が生まれた。

Explorisとの交流とOdysseyとの交流の最大の違いはOdysseyの生徒はかなり日本に精通していて，日本語や文化など様々なことを知っていることである。そのことが生徒にとって一番の関心事だった。感想の中にもそれに関する記述が多くみられた。日本人中学生が英語で外国人と話をするときには，語彙不足や未習事項が多くて，難しい話をすることが難しいが，Odysseyの生徒が日本語を交えて話をしてくれたので，より深い議論をすることが可能となった。日本語に甘えるということではなく，日本人生徒にとっては外国語を学ぶための動機づけにもなったと考えられる。多種多様な考えをお互いが意見交換することができたので，質の高い交流活動ができたと考えられる。

＜交流に参加した生徒の感想＞

・オデッセイの人はとても日本語が上手かったことから，やはり練習すればうまくなれることが分かった。
・日本の文化などに（オデッセイの生徒が）とても詳しく，日本人の私でも驚きました。
・アメリカには，さまざまな人種や宗教の人がいて，日本もそうだけど，アメリカではそれが普通なくらい日常的なものとなっていて驚いた。
・オデッセイの人が日本語を結構喋っていたり，ひらがなを書いていたので，すごいと感じた。
・世界には日本語が話せるアメリカ人の中学生がいるということが分かった。

（3）考察

生徒の感想から国際理解教育の中心的概念である自国と他国の文化や習慣について，今回の交流プログラムを通して，より一層興味をもち，理解することにつながったと考えられる。特にOdysseyの生徒がもってくるリサーチクエスチョンには，政治や習慣など高度で詳細な内容が多い。そのようなリサーチクエスチョンに応じることで，自己の社会事象に関する無知を自覚するとともに，勉強への意欲を高めた生徒が多くいた。

Explorisとの交流では，活動に対する感想が多かったが，Odysseyとの交流においては，文化や習慣などの言及も見られた。Explorisの生徒はほとんど日本語を使用しないが，Odysseyの生徒は，積極的に日本語を使用しようと努力している。他国の言語を積極的に使用する態度が，国際交流において重要であることがわかる。またそうすることで，お互いの意見交換が深まり，レベルの高い国際理解活動を行うことができると考える。

4．おわりに

伝えたい確かな内容を持たせること，相手が伝えたい内容をくみ取ることに重点をおいて指導することが，国際交流において重要な指導の視点であることが分かった。ただし，それだけでは語学に障壁のある中学生にとって十分であるとはいえない。生徒たちにとって有意義な交流にするために，参加型の活動，例えばスポーツや遊びなどの活動を取り入れた交流の中で，コミュニケーションを必要とする場面を設定することも効果があることが分かった。

本稿では，学習意欲を高めたり，他国や自国の文化に対する理解を深めたり，またグローバル・マインドの醸成につながることについて，量的なデータを基にした考察ができていない。次年度は，これらを調査すべくアンケートを作成し，過去2年間で明らかになった指導の指針を基に創意工夫した国際交流を計画，実施し，実証していくことが課題である。

※1「宮島てらこや（会長　上田宗冏　事務局（株）ディアフォロン）」は，子どもたちと本気で向かい合い，世界遺産の宮島をメインフィールドに，日本・広島・宮島の自然や伝統文化を共に学び体験し，「大人が育つ，子どもが育つ地域づくり」を目指しているものである。

参考文献

神原一之．「表現・コミュニケーション力」の育成を目指した総合的な学習の時間の実践．日本生活科・総合的学習教育学会第14回全国大会（広島大会）公開授業活動案・指導案集．2005．pp.58－63

神原一之ほか．中学校における新しい国際交流プログラムの開発―Exploris Middle School・Odyssey Schoolとの交流を通して―．広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要．2008．pp.63－68

小原友行．グローバル・パートナーシップを推進するための人材育成およびプログラム開発―広島大学グローバル・パートナーシップ・スクールセンター設立に向けて―（2007－2008）米日財団奨学寄付金事業成果報告書．2008.

宮原修編集．国際人を育てる―世界の中の日本人―．ぎょうせい．1998.

山極隆ほか編．豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人．ぎょうせい．1999.